



# 廣瀬川

第102号

令和4年  
8月31日

仙台市小学校長会

発行者／田辺 泰宏（会長） 責任者／佐藤 正文（広報部長）

主張

## 「共助の精神」で 新たなフェーズへ

会長 田辺 泰宏（荒町小学校）



先日、東日本大震災以降の歴代会長・副会長が執筆された「主張」を改めて拝読しました。その中に多く記されたキーワードは、正確に数えたわけではありませんが、「復興」、「自助・共助・公助」、「防災・減災」、「地域とともに」、「校長のリーダーシップ」、「たくましく生きる力」などです。これらから分かるとおり、東日本大震災からの教育復興を旗印に、諸先輩方の深く熱い思いと英知を結集させた数々の学校経営の心構えと取組が記されていました。今、私たちがここで校長としての職務を遂行できるのは、これまでの学校づくりに寄与されてきた先輩方のおかげであると思っています。

そして昨年度、震災から10年を一つの通過点として、これまでの復興の軌跡と現在の取組を永きにわたってつないでいく機会と捉え、仙台市小学校長会として「つなごう～3.11から未来へ～」を発刊しました。これまで、学校教育の復興に関わられた皆様からのメッセージ、震災時は小・中学生だった方々の若い力が芽吹き、今、教員として新たなステージに立った皆さんからの頼もしい言葉などが盛り込まれ、次代へ継承するに値するものになったと自負しております。編集に御協力いただきました皆様に、この場をお借りしまして感謝と御礼を申し上げます。

今後、私たち仙台市小学校長会は、新型コロナウイルス感染症への対応を行いながら、学校教育活動

を止めることなく、「Society5.0」という新しい社会、次なる新たなフェーズへ進むこととなります。急速に変わりつつある現代社会において、校長として、教員の資質向上と人員確保、「令和の日本型学校教育」の構築、GIGAスクール構想、コミュニティ・スクールの推進、学校における働き方改革、生徒指導上の諸課題への対応等々、挙げればきりがなほの現場業務をこなさなければなりません。終わりが見えないのも事実です。しかし、よく考えてみると、これらの施策や学校で取り組むことは、子供たちの豊かな心の育成と確かな学びに直結することによって変わりはないのです。

そこで大切になるのが、仙台市小学校長会が結成以来掲げてきた「共助の精神」ではないでしょうか。校長一人一人の豊かな人間性と、これまで数々の困難に立ち向かい乗り越えてきた対応力・課題解決力を結集させ、来る新時代・新たなフェーズにおける学校経営を推進していかなければなりません。

コロナ禍であっても、子供の学びを止めないのと同じで、私たち校長会の「共助の精神」に立った、情報共有や課題を持ち寄っての経営相談等を対面で行うことが重要だと考えます。対面で行うことで、熱く広い議論がなされ、校長一人一人が生き生きと自信を持って学校経営に当たることが、最高の学校づくりだと思います。

### 内 容

○主 張	1
○特集「昨年東北大会開催部から」	2
○提言「今日的課題に対応した創意ある教育」	5
○学区紹介「地域とともに」	6

○特色ある教育活動	9
○仙台市小学校教育研究会より	12
○退会者からのメッセージ	13
○新任校長所感	20
○編集後記	24

特集 昨年東北大会開催部から

特活

# 多様な他者との協働を通して、自己有用感を高める特別活動

## ～第38回東北地区特別活動研究協議会宮城大会を振り返って～

特別活動研究部会 前会長 熊谷 裕行（新田小学校）

第38回東北地区特別活動研究協議会宮城大会が、令和3年11月19日(金)に仙台市立連坊小路小学校を会場に開催された。新型コロナウイルス感染症の状況から参加者を限定し、当日の授業等を録画して、後日、オンデマンドで東北各地に配信した。令和4年1月29日から2月6日までのオンデマンド公開には、218名の参加があり、研究成果を広く周知することにつながった。

今大会では、「多様な他者との協働を通して、自己有用感を高める特別活動」を大会主題に掲げ、仙台市立連坊小路小学校から提案授業を公開していただいた。その後の授業検討会とパネルディスカッションでは、新潟薬科大学非常勤講師の橋本定男先生をファシリテーターとしてお迎えし、御指導・御助言をいただいた。

### 1 提案授業「多様性」と「対話」

連坊小路小学校では、大会主題を踏まえ「多様性」と「対話」に焦点を当てた授業提案がなされた。授業



の中では、異なる他者の考えを受け止め、相手の気持ちに深く寄り添うことで、不安を取り除きながら解決に向かおうとする児童の姿が随所で見られ、改めて、これからの社会を生きる子供たちにとっての「対話」の重要性について、感じさせられることとなった。

### 2 検討会「対話」の土台「学級文化」

授業検討会は、仙台市小学校教育研究会特別活動研究部会の研究推進部が進行役となり、連坊小路小学校の校内研究の研究経過を踏まえながら、成果と課題について話し合いがなされた。成果としては次のような点が挙げられる。①児童同士が互いを理解し合うためのコミュニケーションの土台となる学級文化づくりが重要であること。②理解は推論的であるため、相手への問い掛けなどの方法で確認すること

で、より深い理解につながる。③多様な他者との協働にあっては、リーダーシップとフォローアップのいずれも必要であること。④発達段階を踏まえ、児童と教師との関係から、児童と児童との関係につなげていくことで自己有用感が育成され、やがて自己肯定感が向上すること。等、学びを深めた。

### 3 パネルディスカッション「生かし合う」

パネルディスカッションでは、橋本定男先生から、提案授業及び授業検討会で得られた成果と課題を基に、「多様性」を踏まえた先にある「合意形成」について、示唆に富む御助言をいただいた。これまで特別活動部会では、「心一つに」「協力・協調」という方向性で研究を進めてきた。一方で、今、なぜ多様なのか改めて問われたとき、実は、同調圧力を感じながら異なる考えを表出できずに我慢していた子供たちの存在もあったのではないかと……。 「心一つに」の方向性の中で、はみ出すことを許さない空気があったのではないかと……。 「協力・協働」と「多様性」に関わる危うい面が表裏一体として存在するという大きな課題が見えたことも事実である。

多様性を踏まえながら合意形成を図ろうとすると、お互いの考えを「受け止める」「分かり合う」そして、その先にある共に「生かし合う」段階にまで高める道筋を示すことが、今後、研究を推進する上での大きな課題となった。

### 4 コロナ禍にあっても

今回の東北大会では、「学級活動(上・下)」「児童会活動」「クラブ活動」「学校行事」の各領域の実践をWeb上に掲載した。コロナ禍にあっても、創意工夫に満ちた実践をお寄せいただいた。

今後も特別活動の本質「なす事によって学ぶ」を通して、子供たちのたくましくしなやかに生き抜く力を育成していきたい。



特集 昨年東北大会開催部から

道徳

# 自己を見つめ、共によりよく生きる力をはぐくむ道徳教育

## ～第33回東北地区小学校道徳教育研究協議大会宮城大会を振り返って～

道徳研究部会 会長 高橋 正行（北中山小学校）

令和3年12月10日、仙台市立新田小学校を会場に第33回東北地区小学校道徳教育研究協議大会宮城大会（第48回宮城県小学校道徳教育研究大会仙台市大会）が開催された。

これからの社会を担う子供たちが主体的、創造的に生きていくために、自己をしっかり見つめ、自分のよさに気付くことで「生きる力」を身に付け、また他者に共感し、他者と共存する中で判断力、よりよく生きる心情、実践意欲と態度を育てていけるよう、大会の主題を「自己を見つめ、共によりよく生きる力をはぐくむ道徳教育」と設定した。

大会は、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、紙上での開催であったものの、大会当日は、会場校の新田小学校から三つの授業が公開され、参加者を大幅に制限した中で、授業を基に道徳の授業について議論を深めることができた。

公開授業は、第2学年（授業者：飯野広大教諭）、第4学年（同：黒澤しおり教諭）、第6学年（同：佐久間裕之教諭）から提案され、それぞれ「視点1：多面的・多角的に考える特別の教科道徳の時間の工夫」「視点2：教育活動全体を通じた道徳教育の推進」「視点3：家庭・地域との連携・協力の推進」の三つの視点から主題に迫った。

紙上発表となった四つの課題別分科会（第1分科会：道徳教育の全体計画・別様・指導計画、第2分科会：道徳科における学習指導の工夫、第3分科会：道徳科における評価、第4分科会：地域社会に根ざした道徳教育）では、東北4県、県内4地区より各分科会テーマに基づいた実践発表（報告）があり、教科化4年目を迎えた道徳科の実践の積み重ねを感じることができた。

大会当日の全体会では、仙台市教育センター指導主事の先生方から提案授業に価値付けをしていただいたほか、秋田公立美術大学美術教育センター教授毛内嘉威先生から「道徳科の特質を踏まえた授業づくり」と題して、これからの道徳科における授業づくりについて御講話をいただいた。

毛内先生の基調講演では、①社会の変化がめまぐるしく予測困難な状況に子供たちはおり、持続可能

で多様性と包摂性のある社会を実現していくには、道徳教育は一層必要となる。②道徳科で求められる学びには、ア道徳的価値を理解する学び、イ自己を見つめる学び、ウ多面的・多角的に考える学習、エ自己の生き方について考える学習、の四つの学びがあり、1単位時間の授業の中に必ず含まなければならない。③道徳の授業では多面的・多角的ないろいろな考え方を求めることが大事である。④共通体験が皆違うので、教材で話し合うことが非常に大切で、自分の考えを自由に話せることが大事である。⑤授業では価値を教えるのではなく、価値観を高めさせたり、多様な考えをもとに比べ合い、違いを認め合ったりすることを大事にしたい。など授業づくりに関する多くの示唆をいただいた。

今年2月9日の仙小教研道徳研究部の全体会では、東北大会の提案授業のエッセンス、毛内先生の基調講演のダイジェストをオンラインで配信し、大会に参加できなかった多くの道徳研究部の先生方に伝えることができた。100名近くの先生方がオンラインで参加し、東北大会の成果を共有することができた。

ところで、令和3年度に実施した「道徳教育実施状況調査」の結果報告書がこのほど公表された。それによると、「道徳の教科化」による変化を問う設問に対しては「道徳教育に対する教師の意識が高まった」「授業時数を十分に確保して指導できるようになった」と肯定的な回答が高い割合で得られた反面、「教科書や教科書発行者の指導書に頼る傾向が見受けられるようになった」など、指導方法に関する課題が見られる。

令和4年度は「道徳の教科化」から5年目を迎え、先述した道徳科指導の課題解決が求められる。東北大会で得られた成果を道徳研究部会の先生方を中心として多くの先生方に広め、道徳科の指導力向上や各校の道徳教育の充実に貢献できるよう、今後とも道徳研究部会の活動が活発に行われることを期待したい。



特集 昨年東北大会開催部から

図書館

## 深い学びと豊かな心をはぐくむ学校図書館 ～第40回東北地区学校図書館研究大会を終えて～

図書館研究部会 会長 宮崎 佳子 (湯元小学校)

昨年11月25日、26日の2日間、仙台市において第40回東北地区学校図書館研究大会宮城大会が行われた。東北地区を中心に約300名の方々に参加をいただき、両日ともZoomによるライブ配信(一部録画配信)で、1日目には小学校の公開授業と授業分科会、小学校、中学校、高等学校と校種別に実践発表と研究協議を行い、2日目は全体会と講演会を行った。栗生小学校を大会基地局にして、大沢小学校や住吉台中学校、仙台第一高等学校から東北各県の基地局をつなぎ、参加者へ生配信し交流ができた。

大会を開催する過程において、校種間で連携し何度も話し合い、コロナ禍の中だからこそ、学び合い、語り合う研究大会にしたいという全ての役員の熱い想いと工夫、チームワークが結実した成果であった。

大会のテーマは『深い学びと豊かな心をはぐくむ学校図書館』～東日本大震災10年の今を見すえて～』。テーマ設定の背景として、東日本大震災を経験し、人としていかに生きるか、社会をどのように再生するかという課題に直面し、様々な不安や困難の中、大人も子供も読書によって心の安らぎを得ることができ、改めて読書がもたらす効果を授業づくりに生かすことが求められている現状がある。前回、平成元年の山形大会のキーワード「豊かな心」と「深い学び」、本県で平成30年本吉大会より継続しているテーマ「豊かな心と学ぶ力を育てる学校図書館の活用」、これらを融合してテーマを設定した。学校図書館研究の3領域ごとに次の内容を研究の重点に置いて取り組んできた。読書指導では、「共読」(本を読む・選ぶ・薦める・読み合う・並べる・贈り合う等の共有体験)の経験で気持ちを結び付け読書の楽しさを味わう授業づくり、情報活用では、情報を精査して考えを深め合ったり表現したりすることに生かす授業づくり、学校図書館運営では、知と心の拠点となる環境づくりとその活用、である。さらに、仙台市においては公立図書館や企業等関係機関との連携を土台に、学校図書館活用の「社会との共有・連携」にも視野を広げた発表を行った。

記念講演は、神戸女学院大学名誉教授である内田

樹氏を講師に迎え「コロナ後の世界における教育」というテーマでお話をいただいた。哲学、教育論を専門とし思想家でもある内田氏の論説文は、高校・大学生も身近で、感銘を受けた若者も少なくない。「人間を真に人間たらしめているのは『快樂』ではなく『受難』である。コロナ後の教育は農業モデルで。図書館は無縁の知識が膨大にあるということに気付かせる場所であり、単一の価値観、プログラムに縛られている学校のタイムトンネルである。」語られる言葉の一つ一つが参加者の心のひだに染み入り、感動を得た。



＜栗生小学校 3年生国語「図書館へ行こう」より＞

小学校部会の目玉である公開授業は、大沢小学校5年生の社会、栗生小学校3年生の国語、5年生の道徳でライブ配信を行った。授業の熱量が伝わるように、当日まで何度も中継テストを繰り返した。児童のつぶやきやグループワークの様子が詳細に伝えきれなかったこと等は心残りであったが、三つの授業とも質・量ともにたっぷり図書館資料を活用し、ICT機器も取り入れながら思いを伝え合う深い学びへと展開した。本を手に取り生き生きと活動する児童の姿を発信できたことが今大会の大きな価値の一つであったといってもよいだろう。

研究協議の場のチャット機能では参加者の即時反応を見た。Googleフォームによる大会後アンケートでは、これまでにない多くの具体的な意見・感想が寄せられた。大震災を経てコロナ後の世界の変化がこれからの教育の変容を示唆している。

今大会を通して、いつの時代も学校図書館は存在の意義を変わず持ち続け、児童・生徒に「学びと心の豊かさを享受する宝庫」であることを再認識し、研究を続けていきたいと思いを深めた。

提  
言今日的課題に対応した  
創意ある教育

## 「えがお」が生まれる学校を目指して

第2地区会長 滝川 真智子(立町小学校)

コロナ禍で感染防止対策を継続しながらの、教育活動は3年目となる。

今年度は全校での運動会を実施した。校庭が比較的広く在籍数が少ないことで、密を避けられる状況であったことが幸いした。賞品は体育振興会の方が、子供たちの希望を聞いて準備し、その一つ一つにPTAの役員が「のし」を付けてくださった。「何か手伝いましょうか。」と、その場で後片付けに参加された保護者もあり、温かい励ましと応援の中で、子供たちは存分に力を発揮し、運動会を楽しんだ。

立町小学校には「オール立町！立町っ子のえがおのために」というキャッチフレーズがある。学校と家庭と地域とが子供たちのために協働することを目標にしており、互いの垣根が低いことが強みである。コロナ禍となる前の運動会の高揚感を久しぶりに思い出し、子供だけではなく周囲の大人も、皆一緒に「えがお」で達成感を味わうことできた。

さて、学校は一人一台の情報端末という有効な道具を活用し、授業や校務の改善が図られている。今

を好機と捉えて研修し、流行に遅れないように未来に向けてまい進することが、教職員には必要であると考え。その一方で、子供の希望を聞いて賞品を準備し「のし」を付けるという手間が、多くの人の「えがお」につながったことに心を打たれ、つい加速度が増す流行にあらがいたいと思うことがある。

立町小学校は、開校150周年を迎える準備が進められており、6月には学校運営協議会を設置した。いよいよ「コミュニティ・スクール」の始動である。「オール立町！立町っ子のえがおのために」のキャッチフレーズは、目には見えない校風や伝統、コミュニティの雰囲気として根付き、今後も学校と家庭と地域が結集する力の源となると、確信している。

「アフターコロナ」という言葉が聞かれるこの頃、元どおりになった学校にあるべき不易な教育活動の実現と、子供たちの「えがお」を想像し「地域とともに歩む学校づくり」に努めたい。

提  
言今日的課題に対応した  
創意ある教育

## 多様な子供たちの学びの場を確保するために

第4地区会長 菅原 邦子(七北田小学校)

学校内を巡回していると、様々な状況の子供がいることを実感させられる毎日である。笑顔で楽しく生活している子供もたくさんいるが、学校生活の中で課題を感じている子供も少なくない。中には、教室にすることができず、居心地のよい場所を求めるといったように校舎内のあちこちで姿が見られる子供もおり、その要因は、学習の遅れや発達に関わることであったり、友達関係や集団に対する不安であったりするなど多岐にわたっている。また、登校渋りや不登校、別室登校など、個別対応を必要としている子供に関しては、どの学校にも存在している状況である。子供たちの多様性に応じた教育機会を確保するために、人的資源を生み出すことに苦心している学校が多いことは、地区会の情報交換の場でも話題となっており、対応すべき課題の一つとなっている。

本校でも、子供の実態や学級の実情に応じた指導や支援を行うための体制づくりを行い、日々の対応に当たっているとおりである。

本校での主な取組は以下のとおりである。

- (1) 学年部支援の体制づくり
- (2) 要支援児童のアセスメント(ケース会)
- (3) 学習の遅れへの対応(サポートタイム)
- (4) 集団不適應への対応
  - ① 不登校傾向(別室対応)
  - ② 離席・教室離脱等(個別対応)

実際の対応では課題も多く、どの学校も、様々な課題を抱えつつ取り組んでいるのが実態であろう。

最終的には、「誰が、どの時間に対応できるか」が課題となるが、全ての教職員で子供を支えるという共通認識ができてくると、「私は、この時間に対応できる」という考え方で子供や学級を支援する体制が整ってくる。職員が協力して取り組もうとする思いが、支援を要する子供たちを支えている。

多様な状況にある子供たちに適切な学びの場や支援をするための環境調整は簡単なことではないが、「全職員で全校児童を育てる」という思いを共有することで、課題の解決に挑んでいきたい。

## 提言

今日的課題に対応した  
創意ある教育

## 被災地の思いを未来につなぐ防災学習

第6地区会長 目黒 悟 (七郷小学校)

本校は、仙台市の東部、太平洋沿岸から約5kmに位置し、東日本大震災では、1300人の避難者を受け入れた避難所であった。学区の東部は津波による浸水で大きな被害を受けた。

震災から5年後の平成28年3月には、現在震災遺構となった仙台市立荒浜小学校と統合しており、旧荒浜小の思いを受け継ぎながら、被災地の学校として責任を果たす使命を担っている。

本校では、平成25年度から4年間にわたり、文部科学省から研究開発の指定を受け、学校教育活動全般を防災の観点から広く見直し、関連付け、新たな視点で再構築した。さらに各教科・領域の内容の一部を統合した「防災安全科」を全学年に創設したことが、その後の防災教育の基盤となっている。

現在は、災害に不安を抱くのではなく、小学校段階から災害対応力を身に付けることによって、自分の将来やこれからの社会に夢や希望を持ち、災害に負けないでたくましく生きる児童の育成を目標に、「防災・安全の学習」として取組を続けている。震災を教訓とする防災に関する六つの内容（A. 災害

等の理解、B:命を守る方法、C:備え、D:予測、E:支援者の基盤、F:社会貢献)を発達段階に応じて学び、全ての項目を6年間で学習できるように系統立て、教科横断的な学習カリキュラムを作成している。その中で、子供たちに自助や共助の資質能力を身に付け、自然災害に負けず、自分の将来や社会に夢と希望を持って、これからの生活を切り開いていく素地を養う教育活動を積み重ねている。今後、懸念すべきことは、震災の記憶がない児童に対し、震災の教訓や体験を風化させず、今後の教育活動の中で継承していくことである。児童の直接体験によらない、より汎用性や継続性の高い防災カリキュラムの編成と具体的な指導方法の確立が求められている。

防災教育で得た思いや願いをつないでいくことは、地域の防災意識を高め、そこに暮らす人々の命を守ることにつながる。防災教育の継続こそが、被災地の思いを未来につなげる最良の手段であると考えている。

## 学区紹介 地域とともに

## 人がつながる人來田の丘

福田 理枝 (人來田小学校)

人來田小学校は、生出小学校、上野山小学校、太白小学校の3校から840名の児童を迎えて、昭和57年4月に、仙台市第69番目の小学校として開校した。本校は、仙台市の南西部に位置し、秀峰太白山を北西間近に、更には雄峰蔵王の全容を遠く南西に仰ぎ、東に太平洋を望む恵まれた景観の地にあって、教室からは蔵王連峰の山々の四季の変化を眺めることができる。本校学区の近くを名取川が流れ、太白山の麓の自然は今なお大切に守られており、様々な野鳥の鳴き声に、思わず耳を澄ませて大きく深呼吸をしたくなるような、豊かな環境に恵まれている。

平成9年度に空き教室を利用してマイスクール人來田が開設され、翌年には人來田マイスクール児童館も併設された。地域の方々は「集合場所は学校だ!」を合言葉に様々な活動をしており、コロナ感染対策によりサークル活動等が休止した時期を乗り

越えて、今年度も、感染防止対策を講じながら活動を再開している。地域の学校が、正に子供から高齢者まで集う場所となっている。

人來田小学校区内の道路には、交通信号機が1か所もない。防犯ボランティアの方々が各所で見守り活動をしてくださり、横断歩道で待つ子供がいると地域の方々は停車して下さる。横断歩道を渡った後には、振り向いて運転手さんに会釈をする児童生徒の姿もあって、日常の中にも地域の方との心の交流が見られる学区である。

毎日17時(冬期は16時30分)になると、人來田小学校から地域へと、優しく、美しい音色が流れる。これは、開校10周年を記念して鳴らし始めた「愛の鐘<sup>かね</sup>」である。平成4年4月の児童数は600名で、学区の児童の減少が始まっており、学校・家庭・地域社会で子供たちの健全な育成を図っていこう、との思いを込めたという。それから30年。今でも、人來田の丘には美しい音色が響き渡り、帰宅時刻を知らせている。当時、音色に込めた思いが変わることなく、地域をつなぐ響きとなって届いているのではないだろうか。



## 学区紹介 地域とともに

## 伝統ある校舎を愛する 地域とともに

當房 正浩(根白石小学校)

本校は今年149年目を迎え、来年は開校150周年の節目の年になる。松覚院を校舎に、根白石、西田中、小角を学区として、根白石十七番小学校として誕生してから、幾多の変遷を経て、学校教育にとどまらず、広く地域の社会教育、文化面に至るまで大きな影響を与えてきた。

そして、「仙台市唯一の木造校舎」として知られる自慢の校舎は、建築から今年で92年、多くの卒業生を見送ってきた。泉ヶ岳の秀麗を間近に仰ぐ、緑豊かな根白石盆地の東部に静かにそして堂々と今も地域の拠点として建っている。昭和5年、当時の根白石村財政の約2年分の建築費を掛け、用材は、明治初期に国有地を借り学校用材に植林し撫育してきた材料で、柱も桁も全て節のない材木で、当時宮城県下の評判建築物だった。平成10年度の仙台市都市景観大賞を受賞した。現在でも、当時のままの外観や木の温もりや優しさに触れようと見学をされたり、

写真や絵に収めたりされる方が多く来校している。

長い歴史の中で本校に3世代が通い、地域の方々は今も学校行事や地域の活動に積極的に関わっている。特に、地域全体で行う根白石民俗七夕祭りやかむりまつりは、50年以上の歴史を持ち、地域と児童との交流の場となっている。伝承活動としてアセ踊りや大正踊りを通して地域の特色ある文化や伝統に関わる学習も行っている。令和3年度から休校中の実沢小学校区の児童も含み、福岡小学校、野村小学校との3校の学校間交流学習事業を行っている。修学旅行や野外活動などの活動を合同で行うことで、新しい出会いの中からより多くの仲間との関わり合いを持ち、学び合う楽しさを体験し、多様な人間関係の中で協調性を学んでいる。また、根白石中学校、福岡小学校との3校で設立した「泉かむりの里学校運営協議会」によって、より一層地域との双方向の関係づくりが高まった。冠3校の9年間で育てる子供像「自らかかわり、共によりよく生きようとする児童生徒」の育成を目指した活動にこれからも地域と共に力を尽くしていきたい。

## 学区紹介 地域とともに

## 「笑顔あふれる鶴巻小」 を目指して

前川 武則(鶴巻小学校)

昭和58年4月、鶴巻小学校は、高砂小、中野小、岡田小から子供たちが集まり、71番目の市立小学校として開校した。本校は、仙台市の東部に位置し、東には、太平洋が望洋され、近くには七北田川が流れ豊かな耕土が広がり、自然に恵まれた地である。

また、鶴巻の地は、かつて湿地帯で、江戸時代は、狩猟の場でもあり、鶴が何羽も群れをなして飛んでくることが見られたことから鶴が巻く一鶴巻という地名になったという由来がある。

来年度、40周年を迎える校舎や教室は、あちらこちらに傷みが目立ち始めていたが、令和3年度から、令和4年度末まで1年半の予定で、現在、大規模改修が行われている。もともと、余裕教室のない状況であったが、フロアごとに工事が行われるため、工事が行われる学年は、図工室やパソコン室などに間借りしながらの不自由な生活を強いられるところである。また、同時に給食室の改修も行わ

れているため、自校給食の学校であったが、1年間は、給食センターからの配食となっている。

新年度、転入してくる職員に学校紹介をする6年生が、毎年、学校自慢として入れるものの一つに、「鶴巻スタンダード」がある。生活面や学習面でのスタンダードをそろえて取り組んでいた学校は、私もこれまで経験してきたが、鶴巻小のスタンダードは、それにとどまらず、自分たちの学校をこんな風にしたいたいという「スピリット」が伝統として受け継がれている。また、1年生から6年生までの全クラスが、自分たちの願いを学級目標にまとめ、年3回振り返りの様子を校長室に報告に来ることになっているが、そこにも子供たち自身が、「こんな風になりたい」という願いが感じられる。

このような子供たちを町内会、PTA、防犯巡視員、スーパーバイザー、読み聞かせボランティア、放課後子ども教室など様々な方々から子供の学びを支えていただいている。教育目標の副題にあるように「笑顔あふれる鶴巻小」となるように、保護者や地域の方々との連携を密にしながら、教育活動を進めていきたい。

## 学区紹介 地域とともに

## 地域と歩む田んぼの中の学校

大友 英之 (沖野東小学校)

本校は、昭和58年4月、沖野地域の宅地化に伴い、仙台市立小学校73番目の学校として沖野小学校から分離、開校した。仙台市の東南部に位置し、西は住宅地、他の三方は田畑に囲まれ、稲の生長に合わせて四季折々の自然豊かな風景が楽しめる。校舎から遠く泉ヶ岳や蔵王の山々までが一望できるロケーションも自慢である。

この三方を田畑に囲まれた立地は、開校当初から大きく変わらず、以前は近隣の水田をお借りして稲作に取り組んだり、イナゴ捕りをしたりする特色のある活動が展開されていた。縦割り活動が盛んだったこともあり、縦割りグループ対抗でイナゴ捕りを競っていたこともある。捕ったイナゴは農協に買い取ってもらい、収益金の使い道を児童会で話し合い、ボールを買ったり福祉のために寄付したりしたそうだ。水田を貸して下さっていた地域の方の事情等により稲作活動はなくなってしまい、残念なところである。

学校を支えようとしてくださる方が多いのも地域の強みである。学校支援地域本部「いなごクラブ」を通しての各種ボランティア、親父の会「沖父ちゃん会」などが盛んに活動しており、学校を含めた地域活性化に一役買っている。

本校を語るときには「沖野学園」の取組も欠かせない。平成23年、市教委より中学校区・学びの連携モデル事業のモデル校に指定されスタートした。沖野小、沖野中と三校で連携を図りながら「9年間で育む子供像」についての共通理解の下、指導の連続性や校種間の円滑な接続を持つことに努めてきた。この三校の強い連携は、令和2年度の「沖野学園コミュニティ・スクール」発足へとつながり、学校だけでなく、地域、保護者と連携・協働を更に強めていくことになった。

昔から変わらぬ風景で、地域の支援をいただきながら歩んできた本校だが、学区内に商業施設の工事が始まっており、これからの地域の状況の変化には注視しなければならないだろう。学区の様子は変わっても、地域とのつながりはこれからも維持、発展していくことを願うばかりである。

## 学区紹介 地域とともに

## 地域とともに

小崎 功二 (郡山小学校)

郡山小学校の子供たちは、素直さと明るさ、礼儀正しさにあふれている。保護者や地域の皆様が積極的に学校に関わり、長年努力を積み重ね、育ててきた校風だと思う。

地域講師を招いての水生の危険性が高い地域の実態に基づいた防災マップづくりや、川に囲まれた環境を生かした水生生物の観察、地元農家の方を講師とした本格的な農業体験活動等、学習活動も、保護者や地域の皆様に支えられている。

自校調理である給食においては、地産地消の一環として、地元農家の方から多くの食材を提供していただいております。上記農業体験活動によって自分たちで育てる経験をしていることもあり、児童も地元食材への愛着を持っている。地域に支えられているすばらしい給食である。

また、PTAやおやじの会を中心として実施している児童向けのイベントや、土曜日の児童の活動の場としての「土曜プログラム」の実施など、これまで地域の教育力を取り入れながら双方向の関係を築いてきた学校であり、仙台市教育委員会が学校教育の土台となる方針として掲げている「地域とともに歩む学校」という理念を、いち早く具現化してきた学校だと自負している。

コロナ禍で、各種体験活動が制限されているが、児童の「今」を大切に、個に対する学びの保障だけでなく、より多くの温もりのある体験を与えることも、児童の望ましい人格形成を図り社会性を養うという学校教育の目的達成のためには重要であり、学校の責務であると考えている。今後も大切な子供たちのために、「地域とともにある学校」という伝統を守り育てていきたいという思いで、保護者や地域の皆様と手を携えて、日々教育活動に取り組んでいる。



## 特色ある教育活動

## 学校は地域に浮かぶ船

高橋 研 (茂庭台小学校)

## 1 はじめに

本校は仙台市が造成した茂庭台団地と、そこを取り囲む梨野地区からなっている。接続する茂庭台中学校とは学区が一致しており、本校の卒業生の大半が茂庭台中学校に進学することから、開校当初より小中連携を意識した教育活動を行ってきた。

小中連携目標を「思いやりと感謝の気持ちを大切にする茂庭の子ども」と設定し、中学校と情報共有等を行いながら様々な取組を実践している。

## 2 地域で育つ児童生徒

「子供は地域の宝」連合町内会長は折に触れてこの言葉を口にされる。この言葉に象徴されるように、茂庭台では子供たちの活躍の場を工夫し、それが地域行事として根付いている。特に、例年7月に行われる夏祭りでは様々な取組が行われてきた。

また、市民センターにも子供たちの活躍の場を工夫いただいております。学習成果等を発表する場を提供してもらっている。児童館も併設されており、学童保育に通う児童も少なくないことから、定期的な情報連携にとどめず、折に触れて情報等を共有している。

## 3 地域に支えられる学校

昨年度、小中合同で学校運営協議会を設置し、児童生徒の健やかな成長について、忌たんのない意見等を協議いただいた。具体的で建設的な意見が初回から多数出されるなど、積極的な話し合いが行われたことに驚きを感じた。これまで健全育成の協議や地域懇談を熱心に継続してきた経過があり、委員同士の関係性が熟成されているなど、地域基盤が整っていることを改めて認識した。

## 4 地域や中学校と連携した主な活動

## ○ 地域防災訓練

小中双方の避難所へ、児童生徒や地域の方が指定に従って避難を行う。避難後、児童生徒は小中合同の防災学習、地域の方は避難所運営に関するシミュレーション等を実施している。



- 茂庭台地区健全育成推進協議会  
夏季冬季休業中の巡回活動や健全育成標語の募集、横断幕等による啓発活動を行っている。



- 茂庭台地区夏祭り  
市民C前広場を中心に、地域主催の夏祭りが行われ、児童生徒が踊り等を披露している。



- 茂庭台地区市民文化祭  
秋の市民センター行事に児童生徒も参加している。学習や部活動の発表の場になっている。



## 5 おわりに

先輩の校長先生から「学校は地域に浮かぶ船」と教えていただいた。本校に勤務し、改めてその言葉の重みを感じている。これからも、地域や中学校と共に、児童生徒の健やかな成長を促す歩みを進めていきたい。

**特色ある教育活動****地域を愛し、伝統を守り育てる教育活動**

井上 竜一（泉ヶ丘小学校）

**1 はじめに**

本校は富谷市と接する仙台市北部に位置し、泉ヶ丘団地と大沢地区を学区としている。昭和54年、母体校である将監小学校の周辺団地造成によるマンモス化解消を目指し、開校した。周辺は緑豊かで閑静な環境にあり、野鳥の飛来なども見られる。一方、隣接する工業団地の拡大や、富谷市、大和町にかけての団地造成が相次ぎ、周辺道路の交通量の増加が著しい。保護者や地域は学校に対して協力的であり、支援を積極的に申し出てくださる方々の存在が、地域連携の原動力になっている。

**2 特色ある教育活動について****(1) 大沢の田植踊**

本校では、仙台市無形民俗文化財に指定されている「大沢の田植踊」を伝承している。大沢の田植踊は江戸時代の寛永

年間に、仙台藩二代目藩主の伊達忠宗公が狩の途中で御覧になり、大変優れていたため、伊達家の家紋「竹に雀」を使うことを許可したと伝えられている。明治から昭和にかけて衰退し、昭和30年代には一時途絶えてしまった。しかし昭和56年には大沢青年会の手によって復活し、58年には大沢田植踊保存会が結成され、本校へもその踊りが受け継がれるに至っている。

近年は4、5年生が総合的な学習の時間の中で、「地域に対する関心を深めるとともに、地域を愛する心情を養う」ことを目的とし、踊りの練習に取り組んでいる。「笛」「太鼓」「弥十郎（男踊り）」「早乙女（女踊り）」などのグループに分かれ、大沢田植踊保存会の皆様より指導を受けており、地域の方々と触れ合い、交流する貴重な機会となっている。また、前年度に指導を受けている5年生から4年生へ向けて指導する時間もあり、児童同士による学び合いが行われている。

発表は授業参観や「田植え踊り発表会」の場で、

児童や保護者、地域の方々へ練習の成果を披露している。1年生から3年生は、4、5年生の演技を見ることで、自分たちもこの伝統的な踊りを受け継いでいくのだという意識を持ち、地域を愛する心情を育てる一助となっている。

現在は新型コロナウイルス感染防止のため、練習に参加するのは5年生と限定し、披露する場合は学芸会に限るなどの制限が設けられている。しかし、今後も地域との関りを大切にする貴重な教育活動の場であると捉え、感染対策を十分に行いながら取組を続けていく。また、文化財保護の視点からも、伝統を絶やすことなく、守り伝えていきたい。

**(2) 泉ヶ丘和太鼓「楽鼓」**

児童と地域の方が連携して活動している「楽鼓」は、本校の体育館を拠点に練習し、学区民運動会でその成果を発表している。太鼓の華やかな音で、毎年学区民運動会や地域の祭りを盛大に盛り上げている。新型コロナウイルス感染防止のため、ここ3年ほど発表の場が制限されているが、今後も本校の伝統の一つとして大切にしていきたい。

**(3) 「夏の講座」**

夏休み期間中の2日間、市民センターや地域の方々を講師としてお招きし、「夏の講座」を行っている。料理教室や科学実験、スポーツやダンスなど、講師の得意分野に合わせて講座を設け、児童はそれぞれの興味・関心のある講座に申し込み、活動している。毎年多彩な講座が受講できるとあって人気のある活動だが、感染防止のためここ3年間は残念ながら中止となっている。今後の再開が期待される。

**3 まとめ**

本校の特色ある教育活動は、これまで受け継がれてきた歴史と伝統を守り、更に継承していく活動である。しかし、残念ながら新型コロナウイルス感染防止のため、ここ数年は思うように活動できないのが現状である。今後は、地域を愛し、守り育てていくという心情を養っていくためにも、感染防止対策を十分に行い、地域との深い関りを保ち、互いに連携を図りながら教育活動に取り組んでいきたい。

## 特色ある教育活動

# 子供や教職員の笑顔あふれる古城小を目指して

大久 耕 (古城小学校)

## 1 はじめに

本校は、昭和53年4月に南材木町小、若林小、南小泉小の3校から児童が移籍され、第62番目の市立小学校として開校した。

JR仙台駅から、南東約3kmに位置しており、伊達政宗公が晩年を過ごした若林城址(現宮城刑務所)に隣接しており、付近には法務省官舎や旧公社系企業のアパート、マンション等があるが、戦後のままの道幅が多い古くからの閑静な住宅地である。

令和4年5月1日現在、全校児童数は、15学級(特別支援3学級を含む)337名となっている。

## 2 特色ある教育活動

この2年間、新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、様々な教育活動が制限されてきた。それは校内に限らず、地域と共に実施してきた運動会を学習発表会と一本化し学校単独実施とするなど、地域との関わりにも影響があった。今年度は、各行事は実施を基本に、その方法について検討していく方向で教育活動を進めている。

### (1) 縦割り活動

本校では、協働型学校評価の重点目標を「思いやりを持ち、人との関わりを大切に子ども～ふわふわ言葉を進んで使う子どもの育成～」としているが、この目標に向けた取組として、大きな役割を果たしているのが、縦割り活動である。

各学年を1組同士、2組同士で各7グループ(計14グループ、各25人程度)に分け、6年生が中心となって、活動を運営している。特別活動の授業のほかに、業間休み等を利用した縦割りグループでの集団遊び、朝の挨拶運動を実施している。

その他にも、「1・6年」「2・5年」では、体力テストの補助、生活科・総合的な学習の時間における、異学年への「報告会」の実施などにも取り組んでいる。

学校規模を生かして、様々な活動を通して、異学年の子供たちの間にも関係が築かれ、縦割り活動の時間以外にも関わり合う姿が見られる。その中で、

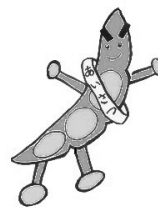
上級生は、下級生に丁寧な言葉で語り掛け、集団から外れてしまいそうな児童がいる場合でも、根気強く、そして温かく接する姿が、数多く見られている。

コロナ禍で子供たち同士の関係の形成が限定されてきたこともあり、高学年を手本としながら、低学年児童が成長する姿を見て取ることができる縦割り活動は更に重要性を増してくると考えられる。

### (2) 「えだまめくん」と挨拶の心構え

今年度は、縦割りグループでの挨拶運動のみ実施しているが、以前は中学校や地域の方々と合同で挨拶運動を行っていた。

本校の挨拶運動のキャラクターとして、誕生から10年以上がたっている「えだまめくん」は、本校における挨拶の心構えを伝え続けている。



え	えがおで
だ	だれにでも
ま	まいにち
め	目を見て

朝、昇降口前に立ち、登校している児童を迎えていると、「校長先生、“えだまめあいさつ”していますか?」と、声を掛けたり、少し遠くを歩く児童は、私と目を合わせて、ほほえみながら挨拶をして通り過ぎて行ったりする。

着任して2か月余りが過ぎたが、入学式、朝会、子供たちとの会話など、「えだまめくん」が本当によく登場する。周年事業等でキャラクターを考案することはよくあるが、こうして忘れられることなく、むしろ教育活動の中心となっている例は、少ないのではないだろうか。

## 3 おわりに

コロナ禍にあって、人との関わりをどのように築き、保っていくかが難しい現状において、これからも縦割り活動や「えだまめくん」を軸としながら、思いやりを持ち、人との関わりを大切に子どもたちを育てていきたいと考えている。



仙台市小学校教育研究会より

# 変革の継続を

仙台市小学校教育研究会 会長 飯野 正義 (袋原小学校)

## 1 はじめに

先日、あるCMを観て心動かされた。

にぎやかな音楽の中、映画の中の飲食店シーンが次々に映し出され、最後に「人生には、飲食店がいる」とのコピーで結ばれる飲料メーカーのCMだった。お酒を片手に語り合う人々が、楽しげで、真剣で、表情豊かで、そのような「人と人とのつながりを作るために飲食店が必要なのだ。」という強いメッセージが伝わってくるCMだった。企画した担当者は、飲食店が人々の人生に寄り添い、コミュニケーションの後押しをしてきたことや、その場所はこれからも必要であることの意味を語尾の「いる」に込めたそうだ。飲食店を応援する心意気に感動した。

では、市教研はどうだろう。「市教研はいる。」と力強く言えるだろうか。

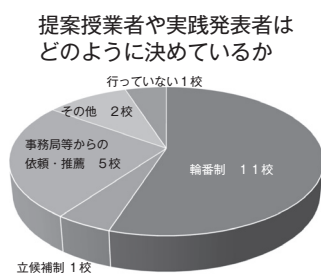
## 2 変革の継続

市教研の会員数はここ数年間、漸減している。

本年度は、全教職員の3分の1ほどしか加入しない学校もあった。市教研で学ぶことの意味を感じない教職員が増えているのだという。また、多忙になるとの理由で加入しない中堅教員もいた。残念ながら、自信を持って「市教研はいる。」とは言えない状況になっている。ここ数十年、教員に期待される役割は膨張し続けてきた。私たちが若手だった頃を基準に、「研修は教員の義務。市教研には入るべき。」とは単純に言えない時代なのだろう。市教研は変革が必要なきにきている。

まず進めることは、コロナ禍前から取り組んでいる「市教研のスリム化」の継続である。令和7年度から実施予定の「所属部会の一体化」についても、今後更に議論を深めて、課題を整理していく必要がある。

改善すべきことの二つ目は研修内容である。現在20部会のほとんどで、授業研究を実施しているが、その持ち方は右のとおりである。



半分以上の部会で輪番により授業者等の依頼をしているが、市教研が任意団体であることを考えれば、授業提案者や実践発表者の選定については、自ら手を挙げた方若しくは依頼を快諾いただいた方などをお願いする方が、より受け入れられやすいのではないだろうか。

また、若手教員が増えている状況を考えると、ベテランや中堅教員による示範授業を見せるようなスタイルにしたり、より実践的な授業作り研修や実技研修を行ったりすることも現状に合っていると考える。

魅力ある講師をお呼びした講話もいだろう。交通費や謝礼等が必要な講師の場合は、現在いくつかの部会で実施しているような教育センターとの共催という形であれば実現の可能性が広がる。会員のニーズを吸い上げて教育センターに伝え、研修の目的に合わせながら、会員が学んでみたいと思う講師の選定につなげていただければ理想的ではないだろうか。



東京家政大学の太田洋先生を講師にお呼びした外国語部会の様子 (教育センターと共催) 令和4年6月1日

## 3 おわりに

市教研は「同好の士の集まり」の色合いも濃い。自分が興味のある教科について学び合う仲間ができ、そのつながりは、ともすると勤務校の同僚よりも長い期間続く。前述の飲食店のように「人と人とのつながり」をつくる場でもあるのだ。

市教研が教員にとって学校以外でも学ぶ楽しさを味わえる組織となるように、部会長の先生方と力を合わせて改善を継続させていきたい。

## 退会者からのメッセージ

# 後輩に期待すること



## 教職員の魅力を 引き出していく学校経営を

堤 英俊（前 東二番丁小学校）

ICT機器の進歩には目覚ましいものがあり、子供たちの学習にも浸透してきています。

電子ドリルは誤答傾向を踏まえて次の出題をアレンジできるので、次から次へと問題を解く意欲を持続させていくことができるようです。スキルアップには効果的なツールだと思います。クロームブックの音声入力機能も進化し、柿と牡蠣を文脈に沿って弁別できるそうです。書字が苦手とノートテイクに時間や労力が掛かる子供にとっては、有効な支援の手立てとなることでしょう。

しかし、いくらICTが進歩しても、教師という存在が学校から消えることはないでしょう。なぜなら、教師はAIが苦手とする子供の内面を見ていくことができるからです。そして何よりも、子供にとって、憧れや尊敬の対象になり得るからです。教師に憧れや尊敬の念を抱いた子供たちは、そこに自分を近づけようと切磋琢磨するはずで

この先、どんなに時代が進んだとしても大切にしたいことは、子供たちにとって教師が魅力的であり、憧れや尊敬の対象であることです。人の魅力はV S O P（Vitality＝活力、Specialty＝専門性、Originality＝独自性、Personality＝人間力）と言われます。教職員が各自の魅力を最大限に発揮し、その魅力が子供たちの意欲をかき立て、よりよい育ちの原動力になるような関わりに満ちた学校を作り上げていかれることを願っています。

## 有事斬然

後藤 景子（前 八木山小学校）

大越元教育長が合同校長会で「六然」から「有事斬然」を紹介くださった際、校長職にあるものとし

て心すべき示唆に富むものと「六然」を調べ、意識して学校経営に臨んできました。特に「有事斬然」は、有事のときでも冷静に素早く対処できるかどうか。平素からの意識・準備は万全かと自らに問う機会となりました。災害があったときでも避難訓練をふだん行っていると、児童も教職員も冷静に対処できる可能性が高まります。災害に限らず、あらゆる有事は平素からの備えをすることで斬然として対処できるようになると、児童の安心・安全を第一に考え何をすべきかを判断することを大事にしたいと意識してきました。

しかし、この2年間の新型コロナウイルス感染に伴い次々と起こる「有事」は想定範囲を超えるものでした。校長は、斬然としていることで教職員はもとより、児童、保護者、地域に安心感をもたらし、難局を乗り越えるリーダーであるべきだったと思いますが、日々判断を迫られる中、教頭はじめ教職員の「やれることをやれる方法で！」の発想とチームワークに支えられました。諸先輩方の御指導と、支えてくださった教職員の皆さんに心から感謝申し上げます。長い間お世話になりました。

## ピンチをチャンスに

高橋 伸二（前 人来田小学校）

東日本大震災から11年、当時の校長が状況を的確に判断して職員に指示を出していた姿が思い出されます。そして、自分は非常時に際して同じように動けるだろうか、時々不安にもなりました。この2年間のコロナ対応は、正に非常時であり、校長としての覚悟と見識が問われる毎日だったと感じています。

以前の私は、前年度踏襲や他校との横並びという発想になりがちでした。コロナ禍の中では地域や学校の実態、感染状況等を踏まえて、難しい決断を迫られることが多く大変でしたが、うまくいったとき

の達成感も大きなものでした。また、職員がその状況の中で何ができるか考え、主体的に動く場面が増えたことも大きな収穫でした。運動会、学習発表会、児童会行事、授業参観など、これまでとは違う考えを出し合って、子供たちに活躍の場を与えることができたと思います。

現代は先を見通すことが難しく、正解が分からない時代だと言われます。新型コロナウイルス感染症の流行は、私たちに新しい発想を求めているのではないのでしょうか。ピンチをチャンスと捉え、子供たちの健やかな成長に向けて御尽力ください。

最後になりましたが、皆様の御健康とますますの御活躍をお祈りいたします。

## 傾聴とは聴すこと

小石 俊聡（前 八幡小学校）

「聴す」の読みは？

こう問われて、私は答えられませんでした。

教師は、情報を得て判断するために「聞く」ことは得意です。「正しい／間違い」「良い／悪い」の判断をしがちだからです。

「聴す」の読みは「ゆるす」。拒否せず、判断せず、ただ受け取ることで相手の存在を許す。これが傾聴であり、傾聴とは聴すことなのです。

校長として9年間。果たして私は、教職員や保護者、地域や子供たちの声を、聴くことができたのでしょうか。聴すことができていたのでしょうか。

担任時代、憧れの先輩がいました。教頭時代、尊敬する上司に出会いました。思い起こせばその方々は皆、私の話を声を聴いてくれていたのです。

だから頑張れました。「この人のためなら！」と自分の時間を削ってでも尽くすことができました。

そんな人間になりたい。そんな校長になりたい。こう思い続けてきました。

組織は人です。図や型がどんなに立派でも、実際に動くのは人なので、互いの心がつながっていなければ、有機的に機能することは難しいでしょう。

傾聴とは聴すこと。これは、教育やカウンセリングだけに必要な話ではありません。これからの人生でも心して生きていこう。今、こう思っています。

## 大きな決断は、晴れた日の朝に

菅原 孝代（前 大沢小学校）

「どうしても決められないことは、ちょっと放っておくといい。三年味噌みたいに『寝かせる』といいんだ。そのうち、ピンとひらめいて決断できる時が来る」と教頭時代、勤務校の校長が話されていた。とても決断の早い校長だったので、見通しを持って早くから考え始めて（寝かせて）いたのだと思う。

校長としての初任校で、どうしても決めかねる事案にぶつかり、夜まで悩んだことがあった。見通しが持てなかった私には「寝かせて」いる時間もなかった。気分転換に読んだ新聞のコラムに「大事な決断は晴れた日の朝に」とあり、タイムリー過ぎて驚いたのを覚えている。なるほど。この状態でいい決断ができるわけではない。次の日の朝、すっきりした頭で考えて、必要な情報を収集し、過去の取組をもう一度教職員に聞いた。一人では分からなかったことがたくさん見えてきた。

コロナ禍で重要な決断を迫られることが多い2年間だった。「寝かせて」みるのも良いと思うし、晴れた日の朝にスッキリとした頭で再度考えてみるのも良いと思う。「決断」について様々な方法が語られていること自体が、「決断」の責任の重さを示していると思う。

皆様の、これからの御活躍を御祈念いたします。自分自身の心身が最良の状態、これだ！と思える「決断」ができますように！大変お世話になりました。心から感謝申し上げます。

## 万謝の言葉

五十嵐 誓（前 栗生小学校）

3月16日深夜、福島県沖で発生した地震の揺れは、11年前の東日本大震災を思い起こさせるものでした。

校舎の被害状況は、天井板の崩落が2か所、校舎をつなぐ金属板のずれが1か所、教室の落下物は多数でした。幸い児童、保護者、教職員にけがはありませんでした。

学校を預かる身として、防災教育の必要性を痛感すると同時に、卒業式を翌日に控え、朝から通常勤務を行う必要がある中での体制の在り方についても



改めて見直していかなければならないと思いました。何より職員の健康を守る責務が校長にはありません。

加えて、新型コロナウイルス感染症により日常生活を制限され、連日ウクライナでの戦争映像を目にし続けている子供たちの「心のケア」も気になります。多くの課題が山積する中で、職を辞すること、心苦しい限りです。

私は、多くの先輩・後輩校長に恵まれました。校長先生方のおかげで、拙いながらも、なんとか学校経営を行うことができました。これまで本当にお世話になりました。言葉を尽くしても尽くし切れません。皆様の御健康と、ますますの御活躍を心より祈念申し上げます。

## 校長冥利

白井 剛次（前 上杉山通小学校）

陸上の話で恐縮です。陸上競技100mにおいて、日本人初の9秒台が出たのは、2016年9月9日でした。その日の競技場は、強風が吹きまくり、種目のほとんどが追い風参考記録となっていました。陸上競技では、追い風が秒速2.0mを超えてしまえば、いくらよい記録がでて参考記録となってしまう。その日、スターターの任務にあっていたのは福岡渉氏。その日の風は「強い風が吹き、弱まり、すぐ強い風が吹いて、少し長い時間弱まる」という傾向にありました。氏は、その周期を読み、男子100mのときは、2度目の強い風の直後にピストルを鳴らしました。直前の女子100mは追い風2.3mだったのが、男子では追い風1.8m、9秒98は見事公認記録となりました。後の桐生選手の談話では、多くの人の支えがあったことに感謝していましたが、その中に福岡氏のことはありませんでした。でも、氏は「日本で最初の9秒台のスターターになれてよかった。スターター冥利に尽きます。」と満面の笑みを浮かべていたそうです。皆さんにとっての「校長冥利」は何でしょう。大変お世話になりました！

## 歩くこと

鶴田 忠幸（前 根白石小学校）

教頭るとき、学校だよりを配付するために主に自転車です。配付をしながら、子供たちの生

活する環境として学区全体を知ることができました。数年前は、台風や大雨が多く、洪水や浸水の心配がありましたが、実際に自分が通った道であれば、危険を予測することや被害の想定をすることもできました。そして、巡視の指示を出す際にも迷いが少なくなりました。

校長として根白石小に着任したときも、子供たちはどんなところを通って学校に来るのか、実際に歩いて見てみることにしました。

根白石地区は、七北田川とその支流があり、大雨になれば洪水や土砂災害の危険があるところでもあります。最初に建てられた学校は、洪水のために流されたと聞いていました。現在の木造校舎は、川から少し離れた高台に建てられています。学区内を歩くと土地の高低差も実際に感じとることができ、避難計画を読んでも実際に避難する際の経路や場所が具体的にイメージをすることができました。

安全・防災計画を立案・実施するにあたって、校長として実際に地域を歩いて見ることは、適切な判断をする際にとっても役に立つことを改めて感じました。「歩くこと」から、教職員とのコミュニケーションも実のあるものになることを実感しました。

## 出会いの中での学び

阿部 千幸（前 住吉台小学校）

多くの人たちとの出会いの中で学び、自分を見つめ、進むべき道をいつも模索しながら歩んできたような気がします。悩んだときに心に浮かぶのはこれまで御指導いただいた校長たちの姿です。

「輪諸意（わっしょい）」と題した職員向けの通信を毎日のように発行した校長。温かいまなざしを通して、子供たちのことや職員の頑張り、地域とのつながり等がつづってあります。こんな学校を創りたいという熱い思いを感じるものでした。

東日本大震災のときには、児童の命を守り避難所運営に携わりながら学校再開に向けて、職員を力強く導きました。先を予測し全体を見ながら最善策を講じていく校長としてのあるべき姿を学びました。

背中を押してくださった出会いもあります。「校長はあったかい学級担任のような思いも必要」と。この言葉は「一人一人を大事にし、温かい心いっばいの学校にしたい」という、自分にとっての学校経営の柱となりました。

教頭時代には信念を持ち学校運営をされるすてき

な校長先生方に出会いました。「学校は人と関わって育つところだからこそ、学びを止めない。」という校長会の絆や団結力は、本当に心強く励まされました。出会った皆様に、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

## 情報の発信

木越 研司（前 東六番丁小学校）

地震や大雨による警戒配備や避難所開設で、夜中でも休日でも関係なく学校に行った経験のある方がほとんどだろう。待機時間が長くなり避難者が誰もいない状態が続くと「学校にいる意味があるのか」と、つい不満を口にしたくなる。状況が分からない不安は不満につながる。同じ思いを私たちが保護者に与えていることはないだろうか。

コロナがまん延して、保健所も市教委も極限の逼迫状態だった時期、学校から市教委に書類を提出しても、対応についての指示がなかなか来ない。

その状況や手続きの流れが分からない保護者は、私たち以上に疑心暗鬼になっているはずだ。するとある人は学校に問い合わせの電話を入れる、ある人は友人に電話をする、ある人はSNSで情報を求める、そうすると、学校は対応に追われ、保護者間ではあらぬ噂や不確かな情報が拡散していく。その火消しに学校は労力を使う、という悪循環に陥る。

そうならないためには、情報を可能な範囲で発信することだ。今はどういうステップのどの段階か、これから先はどのような流れなのか、そして現段階で分からないことも正直に発信する。幸いにも現代は情報発信の手段はいくらでもある。うまく使って発信すれば不安は少しでも和らぐ。そして互いの理解にもつながる。是非そうあってほしいと思う。

## 職員を信頼してこそ

後藤 暁（前 将監西小学校）

校長を経験してみて、自分は多くの職員に支えられていること、やはり組織で学校経営は成立していることを実感しました。職員には感謝しかありません。

組織を成立させること、それは校長の指導力だと思います。決して自分の思いだけで進む傲慢な力はありません。無理難題と思われるようなことを押

し付けても職員は困るばかり。士気も下がります。お互いが支え合うことで組織として成り立ち、達成感を皆で味わう。そんな学校を目指してやってきました。

そのために職員の足りないと思えるところを教頭、教務を通じて指摘すること、うまくいった場合は「良くやってくれました。」と声を掛けることなど上手に接することが重要です。「何やってる。そんなことも分からないのか。」はNGです。職員を信頼・期待した上で常に声を掛けることが必要でしょう。

担任を飛び越し、常に子供たちに指導する校長もいるようですが、私は担任と話をし、担任がしっかりと指導するように励ましてきました。子供たちが良くできたときはもちろん担任を褒めます。

校長が先頭に立って指導するのは、職員の成長を妨げます。ぜひ職員との信頼関係を築きすばらしい学校を作り上げてほしいと思います。

## 子供たちを守るために

後藤 芳浩（前 将監中央小学校）

3月16日深夜、市内震度5強の激しい揺れの地震が発生し、11年前の震災の記憶をほうふつさせるような感覚を覚えました。

11年前の震災後の4月に、新任教頭として学区が津波の被害に遭った学校に着任しました。配膳室には支援物資が山積みになっていた光景が、今でも鮮明に記憶に残っています。また、新任校長の際には校庭に10cmほど津波が押し寄せた学校に着任しました。いずれも沿岸部に位置した学校であり、地震や防災には関心の高い地域でもありました。

現在の学校は津波の不安がないこともあり、余計震災からの教訓を風化させてはならないと強く感じています。震災から10年目の3.11に全校児童に「正常性バイアス」について指導しました。正常性バイアスとは、自分は大丈夫、大したことはないだろうと思いついてしまうことで、そのため避難が遅れてしまったと言われています。

未来を担う子供たちには、正確な情報を伝え常に正しい判断ができるように育てていく必要があります。自分で自分の身を守ることは、現在の新型コロナウイルス感染症の拡大防止にも共有できる考え方です。

子供の命や健康を守ることが学校の使命でもありその推進役として校長の果たす役割は大きい。校長先生方のますますの活躍を御祈念いたします。

## 一日一生

三浦 弘幸(前 泉ヶ丘小学校)

3年前、初任校長として理想とする学校経営を考えて着任しましたが、保護者対応、新型コロナ感染症予防等、その時々々の危機脱出に明け暮れた日々でした。

それでも本校の教育目標の冒頭の言葉「夢と希望を持ち」を合い言葉に、職員からアイディアを出してもらい、時には子供たちからも意見を求め、新しい形での教育活動もいくつか生まれてきました。そうした意味では、ピンチから始まった模索しながらの取組は学校にとってチャンスでもありました。

この原稿を書いているのが3月21日。退職10日前であり、宮城県内震度6強の地震があった5日後でもあります。退職を間近にして、ピンチをチャンスに変えてくれた多くの方々の顔が思い浮かぶようになってきたところでしたが、退職するその瞬間まで気を抜いてはいけない、という気持ちを強くさせる出来事でした。一日一日、緊張感を持って取り組むことがいかに大切かを、退職間際にして思い知りました。

学校を取り巻く困難な課題がまだまだ多くある状況ですが、どうか校長先生方御自身の心身の健康を大切にされ、これからも子供たちが一日一日を大切に、「夢と希望」を持って学び続けられる学校であることを強く祈っております。

## これでいいのだ

丹野 伸裕(前 市名坂小学校)

判断・決断・節目の折々で、私自身が心に刻んできた言葉があります。それは、有名な漫画のせりふ「これでいいのだ」です。

実に哲学的なこの言葉を、私自身、震災以降語り掛けるようになりました。復興に向けた取組も、時に難関極めた保護者対応も、とりわけコロナ禍における東北大会をはじめ、思いどおりに進めることのできない行事の一つ一つにおいても、何度となく「これでいいのだ」を繰り返してきたと振り返ります。そして、校長が笑顔で先生方や子供たちに、「これでいいのです(これでいいのだ)」と声掛けすると、不安を払拭し自身への納得にもつながり、気持ち新たに、共に前へ進めたような気がしています。

校長として大事にすべきは、物事を否定しないこと。全ての出来事、存在をありのままに受け止めること。そして、前向きにとらえ、次に進むこと。人生に無駄なことなど一つもありません。「これでいいのだ」は、私を支える、学校を支える、内なる魔法の言葉だったと今振り返っています。

校長の笑顔が職員の笑顔に、職員の笑顔が子供たちの笑顔に、子供の笑顔が地域の笑顔に。「これでいいのだ」と呪文を掛けながら、そんな前向きな学校づくりを期待しています。皆様、これまで大変お世話になりました。心より感謝申し上げます。

## 最善の判断、最善の決断のために

廣瀬 清文(前 榴岡小学校)

東日本大震災から10年の時を越え、今は全ての学校が新型コロナウイルスに悩まされています。

我々校長は、教育活動を展開するに当たり、あらゆる場面で、前例のない難しい判断、決断を迫られる、正に震災当時を思い起こさせる状況にあります。

教育委員会からの具体的な指示に頼りたいという弱音を吐きたい気持ちも分かります。しかしながら、どの学校にも、それぞれの実情があることを考えれば、目の前の子供たちと向き合う校長だからこそ、最善の判断、決断を下せるのではないのでしょうか。

このような難局を再び乗り越えるためにも、校長会の固い絆が必要であることを強く感じます。

コロナ禍の意外な恩恵とも言えるGIGAスクール構想の急速な整備により、オンライン等による研修、会議等の在り方が格段に進歩しました。

同時に、4月の校長会臨時総会、地区会が2年連続で中止になり、直接対面し対話をすることが、どれほど重要であるかも再認識できました。

コロナ禍で拡充されたICTを大いに活用しながら、校長会会員同士の絆が、これまで以上に強く確かなものとなっていくことを願います。

会員同士の更なる連携の充実によって、校長一人一人が、未来を担う子供たちのために、最善の判断、決断をしていくことを期待しています。



## 「起きる前に行くこと」 「起きてから行くこと」

稲葉 俊一（前 幸町小学校）

震災以前は、学校が避難所になるという意識が、私には希薄でした。震災当日は、子供たちの引き渡しと避難者の受け入れを同時に行うことになり、大混乱だったことを思い出します。当時は、起きる前に行くことが不十分だったと思います。その後私は、被災校の教頭として着任しました。当時は、まだ被災の跡が残っている状況だったので、地域や職員の危機意識も高く、地域と一緒に避難物資の管理や避難所運営の準備などを、起きる前に行くこととして取り組みました。この経験から、危機管理の大切さを学びました。

起きてから行くことは、非常事態であり、臨機応変の対応が求められます。新型コロナの対応では、感染の確認で臨時休業や学年閉鎖の措置、報告や保護者への連絡と矢継ぎ早の対応が求められました。そんな厳しい状況の中、教職員の適切な対応で、難局を乗り越えることができました。震災時も教職員が協力して、学校の危機に対応したことを思い出します。非常時に頼れるのは、教職員であることをコロナ対応でも実感しました。教職員は、知恵を出し一丸となって頑張る力を持っています。非常時こそ教職員を信じ、頼りにすることで乗り越えられると確信しています。

## 子供たちとの出会いに感謝

門脇 恒明（前 連坊小路小学校）

勉強嫌いでしたが、どうしても子供が好きで教師になろうと決心し、人よりも数年多くかけて教師になりました。おかげでたくさんの子供たちとたくさん先生方に出会うことができました。担任への強いこだわりもありましたが、学校経営という違う視点を持たなければならない職種にも就かせていただき、担任では味わえない成就感を数多く経験させていただきました。

先日、校長になってから一番長く一緒にいて、一番苦勞を共にした前任校の教え子が、退職前にどうしても会いたいと連絡をくれました。3月末、退職直前に訪問を受けます。彼女たちとは校長と児童という関係ではなく、大げさな表現ですが、正に同志という関係だったと思います。何度一緒に笑い、何

度一緒に泣いたことか。何度も何度も向かってくる困難を一緒に乗り越えてきました。もちろん私だけではなく多くの教職員がそれぞれの立場で全力で支え続けました。

校長として学校全体を見渡しリーダーシップを発揮することは当たり前のことです。でも、それに加えて、今一番救わなければならない子供の存在をしっかりと見定め、全職員でよってたかってその子を支え続ける。そんな学校を作っていってほしいと願っています。

## 校長会が楽しかった

菅原 光敏（前 若林小学校）

初めて校長として着任したのは角田市立西根小学校でした。仙台市内の小学校しか勤務経験がなく、行政など無関係、長期研修すらスルーしてきた私が、県との交流人事で異動とは「仙台から来たよそ者が」といじめられるのを覚悟で着任しました。

角田市の校長会は14名の構成でした。小学校校長が8名で中学校の校長が3名、それに、角田市の教育長と教育次長と教育専門監が加わっていました。その中の5名が角田市外からの新任校長でした。

最初の校長会での佐山教育長の話が染みしました。「ようこそ、角田市へ。新任の校長先生は不安かもしれませんが、心配は無用です。筆記試験でその教育理念を認められ、人事の面接で人柄や気概が際立って優秀だったから校長になったのです。角田市で自信を持って思う存分学校運営に尽力願います。」

不安が消え意欲が込み上げてきました。毎回の校長会は楽しく、参加する度に勇気をいただきました。そのつながりは、今も続いています。

仙台に戻り、参加した第6地区校長会は、もっと楽しい会でした。情報交換の時間が最高でした。各校長が話す震え上がるような事例に驚くばかりです。でも、どんな困難な事例にも、子供のため、職員のために奮闘している校長の信念の強さに触れ、たくさん学ぶことができました。どれだけ勇気付けられたか分かりません。校長会に感謝しかありません。

## 感謝いたします

及川 俊（前 古城小学校）

これまでを振り返ると、新任の頃、書類作成は手書き、修正液や紙を貼って直しました。ブラウン管付きのワープロ、仕上がりはきれいですが、重くて持ち運びが大変でした。ノート型ワープロ、持ち運びはぐっと楽になりましたが、機種が違くとデータは使えませんでした。ノートパソコン、高価でしたが自腹で買いました。そのうち、一人1台パソコンが準備されました。

そして、GIGAスクール構想。子供にも1台端末が貸与されました。出勤せず自宅で授業する日もそう遠くないと思っていたら、オンラインでの研修や授業はもう既に始まりました。

社会の変化は想像がつかないスピードで速くなり、この先どのような世界が待っているのでしょうか？学校教育に対する国民の期待はますます大きく、これまで以上に教員の資質能力向上が重要です。

スクールリーダーとしての校長の役割は、人材育成や保護者・地域との連携、多様な教育課題の克服、自身の理念の周知、周囲の人材との連携等、多岐にわたっています。定年は延長されますが、役職定年制です。

校長職は激務です。くれぐれも健康には留意し、御活躍ください。大変お世話になりました。校長会の皆様、本当にありがとうございました。

## お世話になりました

松永 弘一（前 沖野東小学校）

校地の東、北、南側に田や畑が広がる緑豊かな沖野東小学校に着任して4年が過ぎました。終わってみれば、陳腐ですが「あっという間だったなあ」という思いです。

この4年間、「学級経営」を大事にしてきました。やはり子供たちにとって、多くの時間を過ごす学級が、安心して過ごせる場であってほしいからです。職員にもその思いを伝え続けてきました。

経験豊かな職員にOJTをお願いし、学級づくりの「技」を伝授してもらったり、障害児理解について話してもらったり、外部から学級経営SVをお招きして学級の状態についてアドバイスをいただいたりし

ました。私も、毎回の職員会議で、これまで先輩から御指導いただいたことを伝えてきました。

児童支援担当を中心としたチームサポートも側面支援として頑張ってくれました。特に、若手教員にとっては心強い味方だったと思います。

さて、子供たちにとってはどうだったのか…。一人一人の気持ちまではつかめませんが、元気な挨拶の声が聞こえると、楽しく過ごしているのかなと“ほんの少し”安心した気分にはさせてもらいました。

これまで皆様には大変お世話になりました。

ありがとうございました。

## 人を残すは上

小野寺 治歌（前 南材木町小学校）

「財を残すは下、事業を残すは中、人を残すは上」これは、明治時代の政治家後藤新平の言葉です。校長になって三年目にこの言葉と出会い、「人を残す」ことを心掛けて努めてきたつもりでした。

三十数年に及ぶ教員生活において、心に残っているのはやはり人との出会いです。振り返ると、子供たちの顔が浮かび、保護者の姿が思い出され、一緒に過ごしてきた同僚の温かさが心に染み渡ってきます。校長になってからも、たくさんの方々に支えられました。特に校長会のつながりは掛け替えのないもので、本当に支えていただきました。

多くの人からいただいた恩恵の分、しっかりと次代の「人」を育てなければと取り組んできたつもりですが、今思い返すと自分の至らなさばかりが思い返されます。

人は人と関わることによって人となる、とするのであれば、関わりが制限される昨今。人を育てるのが難しい時代でもあります。

この困難な時代に、人を育てる、人を残すという価値ある仕事に携わる先生方に、心からのエールと、大きな期待を寄せながら、離れたところから見守り続けたいと思います。

これまで支えていただいたことに感謝を申し上げます。ありがとうございました。



## 新任校長所感

## 学校経営に寄せる思い

保護者や地域の方の  
思いを大切に

今野 孝 (中田小学校)

中田小学校の北側の道路に、信号機のない横断歩道が2か所あります。交通量も多く、見通しも良くないので、朝、時間があるときには、黄色のベストを着て児童を見守ることにしています。我が子と楽しそうにお話をしながら歩いてくるお母さんや、我が子の姿が見えなくなるまで手を振っているお父さん、「おはようございます」と挨拶してくれる子供たちに、朝から元気もらっています。

また、おそらく地域の方であると思いますが、横断歩道で子供たちの姿を見掛けると、多くの車が止まってくれます。中には、2か所の横断歩道で止まってくれる方もいらっしゃいますし、自転車に乗った通勤途中の方からも「おはようございます」と声を掛けていただき、学校に寄せる温かな気持ちを感じています。

本校は、今年度で創立150年目を迎えます。校長室には、50名の歴代の校長の写真や木造校舎の写真、尋常小学校当時の卒業証書などが飾られており、長い歴史の重みを感じます。

これまで先輩方が培ってこられた中田小学校の伝統を引き継ぎ、保護者や地域の方の思いを大切にしながら、子供たちの笑顔のために、教職員が一丸となって学校経営に取り組んでいきたいと考えています。

## 初日からの「大炎上」

見田 佳代 (若林小学校)

4月1日午前11時。挨拶回りに出るために職員室へ声を掛けようとしたら、全員が立って窓の外を見

つめていました。校庭のすぐそばの家から真っ赤な炎と黒煙が立ち上っています。火災発生です。

私は「子供が来たら寄らないように、先生方、行って止めてください。」と指示を出すのがやっとでした。騒然とする職員室から体育主任が通報し、懸命に状況を説明していました。外へ出ると、技師から「校長先生、プールの鍵を開けました。いつでも協力できます。」との頼もしい報告がありました。教職員は、自転車で通り抜けようとする子供や、近付こうとする大人に声を掛けて止めました。いつの間にか校庭脇の堤防上では大勢の人がスマホをかざしていました。教頭は、学校前の道路に立って大きな声で消防車を誘導し、技師が学校の敷地の車止めを外してぎりぎりまで車両を入れ、やっと消火作業が始まりました。

火災による死傷者はいませんでした。今回は、教職員の迅速かつ適切な対応に大いに助けられました。不慮の事故は、いつ起こるか分かりません。校長は、着任したその瞬間から、学校の全てを背負って言葉を発し行動できる存在でなければならないと、深く心に刻み込まれました。忘れられない校長初日です。

## 地域とともに歩む学校づくり

留守 智信 (鹿野小学校)

本校の校章の真ん中には、シンボルである鹿の文字が書かれており、子供たちのたくましさを表しています。その周囲の四角形はPTA、地域、日本、世界を表しています。この校章からは、学校、保護者、地域が協力し合い、将来、社会や世界に向かってたくましく生きる子供たちを育ていこうという思いが感じられました。正に、次世代の学校教育の在り



方を既に学校創設時に理想として掲げていたのだと思います。実際に鹿野小には、以前から「鹿野学区教育振興連絡協議会」という組織があり、学校教育に御協力・御支援をいただいております。そのようなことから、鹿野CSを新たに設置した際には、地域の方から「鹿野小は何年も前からコミュニティ・スクールみたいなものだよ。」「何かやってほしいことがあったら言ってね。」と声を掛けていただきました。このような恵まれた地域環境の下、子供たちも素直に育っており、子供たちと関わっていると自然に笑顔になってきます。これからも鹿野CSとして、地域の良さを生かしながら、学校、保護者、地域が一体となり、子供たちをよりよく育ていく「地域とともに歩む学校づくり」を継承・発展していきたいと思っております。

## 日々試される人間力

大友 雄一郎（折立小学校）

経営者となって3か月が過ぎようとしています。日々充実した時間を過ごしています。充実しているというのは、何の問題もなく平和であるということではなく、多くの難問に対して、常に判断が求められることへの充実です。自らの教職経験を基に判断できることばかりではなく、一人の人間として、どんな物の見方や考え方をしているかが試される毎日です。正に自分自身の人間力が問われています。

孔子の「論語」の一節に「子四を絶つ。意母く、必母く、固母く、我母し」とあります。意味は、「自己鍛錬に必要なのは、四つのものを絶つことである。第1に自分勝手な「意」、第2に決められた通りにやらなければならない「必」、第3に一つのこと執着する「固」、第4に自分のことしか考えない「我」である。」です。特に「我」については、常に意識しています。責任者という思いが強くなると「我」が前面に出てしまう危険性があります。経営者として大切にすべきは、「我」ではなく、「子供」であり、「保護者」であり、「地域」であり、何より「教職員」であるべきです。日々鍛錬を重ね、折立小に関わる全ての人間の今に真摯に向き合っていきたいです。

## 鶴ヶ谷との縁

小田 暁（鶴谷小学校）

私は大学卒業まで鶴ヶ谷の北、鶴が丘で育ちました。小学校時代は鶴谷市民センターで行われていた剣道教室に通っていました。中学校時代は友人と自転車でよく鶴ヶ谷ショッピングセンターに買い物に来たものです。高校の3年間も鶴ヶ谷の高等学校で過ごしました。通学ルートの途中に鶴谷小があり、毎日本校の前を自転車で通っていました。本校に校長として着任が決まったときには懐かしい鶴ヶ谷の名に改めて「縁」を感じたのでした。

鶴ヶ谷はバスの本数も多く、とても住みよい町であると感じます。本校は今年、若干ですが児童数も増えました。若い家族も多く、活気のある地域であると感じています。校地はとても広く、児童館が併設されています。立派な体育館もあり、東日本大震災当時は避難所として、地域を守ったとのこと。校長室前の観察池では、美しいはずの周りを無数のおたまじゃくしが泳いでいます。学習環境として申し分のない学校であると感じています。

今年度、コミュニティ・スクールを立ち上げます。地域との連携をますます深めるとともに、コロナによって中断していた地域活動の再開を検討しながら、活気ある鶴ヶ谷地域の力になりたいと思っております。

## 子供たちが「学校大好き」と言える学校を目指して

武田 芳典（幸町小学校）

表題は、今年度の協働型学校評価重点目標であり、私が目指す学校の姿でもあります。重点目標を達成するための取組の一つとして、本校では教育課程に「伝統文化教育」を組み入れています。

茶道や能楽、和楽器をはじめとする豊かな和の体験活動は、子供たちに「おもてなしの心」を育みます。おもてなしの心は、相手を思いやる「思いやり心」でもあり、相手を意識して行動することにつながります。校舎内で擦れ違う際、きちんと立ち止まって挨拶をする子供が多いこと。また、学校生活の様々な場面で、上学年が下学年を優しくお世話す

る姿を見ることができるのも、伝統文化教育に取り組んできた成果の表れです。

本校の伝統文化教育は、保護者・地域の皆様だけでなく、外部講師や多くの学習ボランティアの方々に支えられています。本校の取組に賛同し、御支援いただいている皆様へ感謝しながら、継続することでおもてなしの心、思いやりの心を育み、子供たちの「相手意識」を高めていきます。

伝統文化教育を学校経営の柱の一つとして、「子供たちが『学校大好き』と言える学校」づくりに、全力で取り組みます。

## 手本となって背中で見せる

武田 理恵子（桜丘小学校）

本校はセンター給食です。感染防止対策のため下膳の仕方を変えたり学級増で食缶の数が増えたりして、パートさんたちの搬送までの仕事が多くなりました。残食を減らすよう子供たちに呼び掛けたり学級で処理できるものはお願いしたりしましたが、もう少し何かできることはないかと考え、私が各階にある大きなごみ袋を捨てることにしました。

ある日、3階の配膳室からごみ袋を持って出ると、一人の6年生男子が「校長先生、僕持ちますよ」と手伝ってくれました。それだけでもうれしかったのに、次の日別な6年生男子が、私を見掛けて手伝ってくれました。そのうち3人、5人と手を貸してくれる子が増えていったのです。私は感動と喜びで感謝するとともに子供たちを褒めました。更に、昨年度立ち上げた給食委員会で、子供たちが、自分たちにできることはないかと考え、当番制でごみ袋を捨てることにしたのです。

子供たちは、私が皆のために働く姿を見て自分たちも誰かの役に立ちたいと思ってくれたのだと思いました。小さなことでも子供たちは私の背中を見ている、そう実感しました。そして学校を動かし変えていくのは、教師であり子供たちだと改めて思いました。子供たちがこの優しさや相手を思う気持ちを失わないよう、しっかりと学校経営を行っていきたいです。

## こんな子供たちに育てたい

堀越 俊秀（沖野小学校）

校長になる前に、校長になったらどのような学校経営を目指していくか考えたことがありました。一番は楽しい学校。では、楽しい学校とはどういうものか。自分はどのような子供に育てたいのか。そう考えたとき、二つのことが頭に思い浮かびました。一つは「思いやりのある子」。もう一つは「失敗を恐れずに何事にも挑戦できる子」。そんな子供になってほしい。人は、一人では生きていけない、必ず誰かの支えや力を借りて生きている。そう考えると、生きていく上で「相手を思いやる気持ち」というものがとても大切だと感じます。また、できるできないではなく、やるかやらないか。やる前に諦めずに、まず挑戦してみる。挑戦することで見えること、次につながるがあると思います。「失敗は成功のもと」私が大好きな言葉です。人生において自分を最も成長させるのは、経験だと考えています。失敗を恐れずに何事にも挑戦できる子に育てたい。また、そういった個々の挑戦をお互いに応援し合える、そんな思いやりのある子に育てたい。校長となった今、日々「校長としてできることは何か」と頭を悩ませています。校長になって約3か月。そろそろ始動していかなければと思い始めている今日この頃です。

## 子供たちの「笑顔」のために

深瀬 貴之（野村小学校）

「校長先生！」と呼ばれ、間もなく3か月になろうとしています。

本校は全校児童数が30名ということもあり、子供の名前と顔を全員、覚えることができました。それぞれの個性や特長についても分かってきました。子供たちが、毎日、校長室のドアを開けて元気よく「おはようございます」「さようなら」の挨拶をします。子供たちの「おはようございます」の挨拶は、一日の活力につながり、「さようなら」の挨拶を聞くと、一日を無事に終えることができたことと安堵します。

自然も豊かで保護者や地域の方にも支えられてい

る野村小学校です。保護者や地域の方々との距離が近く、直接顔を合わせ、話をする機会もたくさんあります。そのおかげで、お互いに理解が深まり、信頼関係が築けるのだと感じます。

今年度もコロナ禍ではありますが、感染防止対策を講じながら、できるだけ学校行事等を実施し、子供たちに様々な体験や経験を積ませ、より大きな成長へとつなげていきたいと思っています。子供たちの「笑顔」のために、学校・保護者・地域の三者が力を合わせ、共に歩みを進めて行きます。

## 思いを引き継いで

高橋 興（将監西小学校）

校門で挨拶を始めた初日でした。「おはようございます。」の挨拶の後に「あっ。プラスワン忘れちゃった。」とつぶやく児童がいました。プラスワンとは挨拶に一言加える活動で、将監西小学校では合い言葉のようになっています。

プラスワンの挨拶を重ねていくと、必然的に子供たちとの会話や送迎の保護者との会話も増え、心理的な距離が近くなった感覚を持ちました。「友達や6年生がサポートしてくれるからありがたい」との声も届き、校門に立っていることで登校時の不安の解消や安心につながっていることを感じます。

センターの新任校長研修会の講師の方が話された「全ての子供の学習権を保障する」との言葉も強く印象に残りました。様々な事情を抱えた子供たちが在籍しているので、クロームブックなどを上手に活用しながら全員の学習権を保障することに力を注がなければならないと考えた研修でした。

歴代の先輩方が築かれた思いを受けて、「プラスワン」を継続し、今後も様々な場面で子供たちの安全・安心と学習権を保障すべく力を尽くしてまいります。

## 子供と地域をもっと知ることから

山田 隆（加茂小学校）

今年度、加茂中・虹の丘小・加茂小の3校による「加茂中学校区コミュニティ・スクール」がスター

トしました。第1回学校運営協議会で運営委員の方々や顔を合わせ、若い方がたくさんいらっしゃることに感銘を受けました。各団体がしっかりと機能し、地域と学校を支えてくださっています。コロナ禍にあっても地域の活動は止まっていません。

この恵まれた地域環境に感謝するだけでなく、地域の方々と同じにして学校の教育活動を進めていきたいと強く感じています。

では、新任校長の私にできることは何か。今の自分にはまだ確固たるビジョンがありません。ただ、爽やかな挨拶をしてくれる、友達に優しくしてあげられる、すてきな子供たちと過ごす日々は充実しています。そして、この加茂小の子供たちをもっと伸ばしていきたいという思いがあります。

地域の方々のお力を借りながら、職員と力を合わせ、加茂っ子に育てたい資質・能力を確実に身に付けさせていくために、まずは子供と地域のことをもっと知りたいと思っています。その上で、自分の学校経営ビジョンをしっかりと見定めたいと考えます。

## 夢の広がる楽しい学校

小山 裕巳（八乙女小学校）

「校長先生、おはようございます。」朝、校内で私を見付けると、そばにきて自分から挨拶をする子供がたくさんいます。こちらも負けずに挨拶しようという気持ちになる、毎朝のうれしい瞬間です。

着任した4月「顔を上げて、明るく爽やかな挨拶をする子供が大勢いる」という印象を受けました。この地域に住む人が、毎日子供たちに声を掛け、登下校を見守っている結果なのだと思います。どの学校でも挨拶の指導をしますが、子供たちが実際に進んで挨拶をするかどうかは、やはり保護者や地域の力によるところが大きいのだと、改めて感じます。

八乙女小の目標とする学校像は「夢の広がる楽しい学校」です。学校は、子供たちの将来につながる学びや経験を積ませる場であり、ここでなければ味わえない楽しさを子供たちに体験させる場です。この学校で、子供たちの夢を広げていくことができるよう、保護者や地域の皆様が持つ力を活用し、学校経営に臨んでいきたいと考えています。



「おはようございます」の爽やかな声が広がる学校で仕事ができることに感謝し、子供たちの成長に力を尽くしていきたい…そのために校長として何ができるのか、自問する毎日です。

## 笑顔いっぱい夢いっぱい

佐藤 美知子（虹の丘小学校）

朝、爽やかな風と小鳥の声に迎えられ、元気に登校する子供たちです。当たり前風景に、大きなうれしさと幸せを感じます。虹の丘小に着任し、50日が過ぎようとしています。

目指す学校像として「夢を持ち、夢を実現できる子供が育つ学校」が掲げられています。すてきなキャッチフレーズだと思いました。あふれるたくさんの「夢」を、子供たちと、また、教職員と地域の方々と語りたと思いました。校歌にも「明日への夢を語る丘」「未来にかけし虹のはし」という歌詞があります。キーワードは「笑顔いっぱい夢いっぱい」と決めました。

「仲間と元気に遊び自らよく学ぶ子供」の目指す児童像の下、元気だから毎日頑張ろうと思える、仲間がいるから楽しい、そして学ぶ喜びがある、そんな学校を、教職員と子供たちと、地域の皆様と一緒に形にしていけたらと思います。

虹の丘小の私たちは、本当に多くの方々に支えられて毎日楽しく元気に過ごすことができます。心強いです。焦らず、悩みつつも確かな一歩を

歩み続けられるよう努力していきたいと思います。

## 住吉台小学校に着任して

鎌田 悟朗（住吉台小学校）

住吉台小学校に着任して感じたことは以下のとおりです。子供たちは、明るく、素直で、人懐っこく、挨拶もしっかりできる子が多くいます。職員は、真摯に、明るく熱心に子供たちを指導しています。集団に適應することが難しい児童など困難な事例もありますが、組織的に対応することができています。地域の方々の支援は、住吉台小学校の最大の強みで、「おらほの子供を健全に育てよう」という意識を高く感じます。様々なボランティアの方々が愛情を持って子供たちに接していただき、学校支援地域本部の方々が、学校と外部の方々と結ぶ仲立ちを積極的にしてくださっています。この特色ある力を生かして、子供たちに住吉台小学校のスローガンである「あたたかい心」を培っていきたくと思っています。

安心・安全な学校づくりのために、いじめに対しては、情報を共有して組織対応できるよう徹底し、また、カリキュラム・マネジメント研修を実施して情報モラルや防災教育等と関連付けて、児童の危機対応力の育成を図っていきたくと思っています。

教職員に活力があってこそ、子供たちも生き生きと生活することができます。働き方改革を推進し、活力ある学校づくりを目指したいと思っています。

## 編集後記

100年以上の歴史を持つ全国高校野球選手権大会で、仙台育英学園高等学校が初優勝し、深紅の大優勝旗がついに「白河の関」を越えました。そんなうれしいニュースとは裏腹に、新型コロナウイルスの宮城県内の感染者数は、5,000人に迫る勢いで、また、連日国内各地で土砂災害警戒情報が発令されるなど、様々なニュースが報じられています。そのような激動の中、このたび会員の皆様の御協力により、「廣瀬川」102号を発行することができました。

広報「廣瀬川」の編集に携わって、役得だなと思うことが多々ありました。その一つに、過去に発行された「廣瀬川」を必然的に腰を据えて読む機会が生じたことが挙げられます。

平成はじめの「廣瀬川」に目を通すと、自分が若い頃お世話になった方の思いが伝わってきます。平成24年発行の第80号からしばらくは、震災直後ということもあって、どの方からも復興に懸ける意気込みを感じることができます。このように、広報「廣瀬川」は、その時代その時代の方々の深い思いを感じることもできるものだと思います。

発行にあたり、御多用の中、玉稿を賜りました皆様に心から感謝申し上げます。

ありがとうございました。

(102号チーフ 後藤 記)

編集担当者：後藤信博（馬場小） 板垣和幸（西多賀小） 井上竜一（南光台東小）